LL ニュース
No. 30
March 15, 2005
愛知大学豊橋語学教育研究室

特集　―ことばの発想―

ワット・ヤーンナーワー（タイ国バンコク都サートーン区）
タイ国王ラーマ３世（在位：1824～1851）が、タイに多くの利益をもたらしたジャンク船の姿を後世に残すために建立したとされる実物大のジャンク船型の仏塔。海外との交易には、多くの異文化接触があったことであろう。

CONTENTS

◎特集　―ことばの発想―
- 日本語と韓国語、日本人と韓国人（金　昭鋏）…… 2
- 同音のことばと吉祥（臼田真佐子）…… 4
- 国が違うと…　―タイの諺・格言から―（一宮孝子）… 6
- 英語の発想（三川克俊）…… 8
- 日本語の発想 ―心の距離をスイッチング―（山本雅子）… 10
- ドイツ語と日本語の発想の違いについて（新形信和）… 12
- フランス語らしい表現（高橋秀雄）…… 14
- ロシア語の発想（清水伸子）…… 16
- アラビア語の語根と外交（鈴木規夫）…… 18

◎私の英語教授法
―外国語学習の楽しさの復権―（早川　勇）…… 19
◎おすすめのドイツ映画（河合まゆみ）…… 20
◎ミュンヘン（土屋洋二）…… 21
◎ＬＬ自習室を利用しよう!! …… 23
◎公開講座「言語」2005プログラム…… 24
◎外国語検定試験奨励金について…… 24

日本語と韓国語、日本人と韓国人

～微妙に違う言葉と習慣～

非常勤講師（韓国・朝鮮語担当）
金　昭　　鋏

最近の「冬ソナ」ブームのおかげでしょうか、韓国に関心を持つ人が増えています。先日も韓国映画の試写会がありましたが、会場には開演前から長蛇の列が出来ていました。こんなことは私が日本に来た10年前には考えられないことでした。その頃はよほど韓国に関心のある人でないと、韓国の俳優の名前なんて知りませんでした。それが今では、テレビをつけると毎日「ヨン様」、「ビョン様」（ちなみに、「美しき日々」のイ・ビョンホンのこと）ですから、その変化には驚かされます。このブームがいつまで続くか分かりませんが、韓国語を勉強し韓国の文化に関心を持つ人が増えているのは韓国人として嬉しい限りです。

皆さんもご存知だと思いますが、韓国語と日本語はとてもよく似た言語です。語順もほとんど同じですし、漢字語も発音がよく似ています（例えば、新聞＝シンムン、高速道路＝コソクドロ）ので、日本人にとって韓国語は一番勉強しやすい言語です。ハングル文字にさえ慣れさえすれば、かなりのスピードで初歩の段階はクリヤーできます。それは韓国人にとっても同じことで、日本語はもっとも勉強が「楽な」言葉として人気があります。韓国では、日本語は英語に次いで最も学習人口が多い外国語です。

一方、韓国語を学ぶ日本人と日本語を学ぶ韓国人の間には、二つの言語の微妙な違いによって引き起こされる誤用が多くあります。例えば、助詞の使い方です。日本語の「バスに乗る」は韓国語では「バスを乗る」になります。同じように「先生に会う」も「先生を会う」です。また、指示代名詞も微妙に違います。日本語では相手も知っていることを「あの」で表しますが、韓国語では「その」を使います。韓国人と話していて、「その人」が知り合いなのか、知らない人なのか分からない時があるかもしれません。韓国語の「あの」は距離的に離れている場合に限って使われるので注意してください。それから、同じ漢字を使っていても意味の違う語もあります。韓国語の「愛人」は日本語の「恋人」です。これを韓国人が日本語を話す時にそのまま使い、初対面の日本人に「愛人はいますか？」と聞いたら、相手はさぞびっくりすることでしょう。韓国語の「便紙」はトイレットペーパー、ではありません。手紙のことです。ですから、ラブレターは「恋愛便紙」となります。何か汚そう、なんて考えないでくださいね。

私は大学で日本語を勉強し、仕事で１年間長崎県にいた後、日本人と結婚し名古屋に来ました。日本の生活にもすっかり慣れ、納豆も平気で食べられるようになりましたが、日本人との間には乗り越えにくい違いもあります。それは言葉の違いというよりも、言葉の背後にある文化の違いとしか表現できないものです。例えば、韓国人は初対面の人にもプライベートな質問をよくします。「何歳ですか？」、「結婚していますか？」、「給料はいくらですか？」などなど、相手に関する情報をひとつでも多く集め、自分のプライバシーもさらけだして、一気に親しくなろうとします。ところが、日本人はあまり自分のことを話そうとしません。結婚して間もない頃、団地の隣に住む同じ年頃の主婦に「お出かけですか」と言われ、「ええ、今日は千種の生涯学習センターで韓国の話をするんですよ」とか、「松坂屋のセールに行くの。一緒に行かない？」などと答えていました。でも、こちらが聞くと、「ちょっと、その辺まで」というお決まりの答え。日本人どうしならそれでもいいのでしょうが、ちょっとさびしい気がしました。それから、団地の階段の踊り場で重い買い物袋を提げたまま長時間話し続ける主婦の姿を見て、「どうして家の中で話しをしないんだろう」と思いました。韓国だったら、どちらかの家に上がり込んで、コーヒーを飲んだり果物を食べたりしながらおしゃべりを楽しみます。

韓国人は親しくなると平気で頼みごとをします。親しくなるにはむしろ迷惑をかけた方がいい、と言ったらいいのでしょうか。わが家のキムチは母の手作りです。韓国に帰るたびにかなりの量を持ち帰るのですが、すぐになくなってしまいます。そこで韓国に帰る友人がいると、「帰りに空港で母に会ってキムチを受け取って」と頼みます。そして、名古屋

空港に私が車で迎えに行き、その友人の家まで送ります。キムチをおすそ分けすることは言うまでもありません。それに比べ、日本人は他人に迷惑をかけることを極度に嫌うようです。私の夫は大阪の大学を出ているので関西に友人が多いのですが、出張があっても友だちの家に泊めてもらうことはせず、必ずホテルを予約します。「もう学生じゃないし、向こうにはカミサンも子どもいるんだから。それに泊めてもらうのに手ぶらというわけにいかないだろう」と言います。「親しき仲にも礼儀あり」といいますが、何だかお互いに近寄らないようにしているようで、私には不思議でなりません。

これと関係があるかどうか、日本人に物をあげるとするとすぐに「お返し」がきます。夫の実家が長野なのでよくリンゴを送ってもらうのですが、これを近所の主婦に渡すと、「ちょっと待ってて」と言って台所からミカンを持ってきたのを見て驚いたことがあります。お中元やお歳暮、年賀状、結婚祝い、香典、どれもお返しをしなければならないものばかりです。韓国でも年末にクリスマスカードを送りますが、友人やお世話になった人に送ることが目的であり、もらったからといって必ず送り返さねばならないという強迫観念はありません。「割り勘」も韓国人にはなじめない習慣です。ランチタイムの食堂でお金を払うとき、「別々でお願いします」といって長い列ができているのをよく見かけますが、店にとってはかなり迷惑ですよね。喫茶店で何人かのおばさんたちが割り切れない１円をめぐって、「今日は１円借りとくわ」と言っているのを聞いて吹き出しそうになったことがあります。次にコーヒーを飲む時、そのおばさんは借りた１円を返すのでしょうね、きっと。韓国では誰かがまとめて払い、次に食事する時にまた別の誰かが払えばいいと考えます。何週間か何ヶ月か経てば、結局は「割り勘」になるのですから。結婚祝いや香典も、次にその家で何かがあった時に返せばいいと考えます。このように、その場で貸し借りをゼロにしようとする日本人に比べ、韓国人は人間づきあいをめぐる時間の感覚がはるかに長いと言えるでしょう。

これは夫が韓国で日本語教師をしていた時の話ですが、学生に本やビデオを貸すとなかなか返ってこないので、「あのビデオどうだった？（日本人どうしなら「そろそろ返して」という意味だそうです）」と聞くと、「とても面白かったです。それで友だちに貸しました」と答えたそうです。夫は心の中で「何で俺のビデオを断りもなしに貸すんだ」と怒ったそうですが、一応教師である立場上、「そう、でも見終わったら僕のところに持って来るように言っておいて」と頼んだそうです。結局、そのビデオが戻ってきたのはクラスの学生のほとんどが見終わった後で、日本で録画した大切なテープはボロボロだったそうです。私がその話を聞いた時、こう考えました。最初にビデオを借りた学生はそのドラマ（「東京ラブストーリー」です。時代が分かりますね）がとても面白かったので一人で見るのはもったいないと思ったのではないか、友だちにも見せることで先生はこんな面白いビデオを持っているんだということを知らせたかったのではないかと。夫は「へえ、そうなんだ」と口では言っていましたが、納得できないようです。この韓国の「分かち合い」の精神が理解できないわが夫は、仲間とハイキングに行っても、自動販売機で飲み物を買って一人で飲んでいます。「どうしてみんなの分も買わないの」と言うと、「飲みたければ自分で買えばいいじゃない。だいたいみんなが何を飲みたいか分からないし、一人ずつ聞いて回れってわけ？」と涼しい顔をしています。

まだまだ韓国人と日本人の考え方の違いを示す例はたくさんありますが、皆さんにどうしても言っておかなければならないのは、その違いは実に微妙なものであって、決定的なものではないということです。世界の中で見れば、韓国人と日本人は区別ができないほどよく似ています。とくに若い世代にとって、日韓の「壁」はますます低くなっています。ただ、実際に付き合い始めると、似ている分だけ通じなかった時に驚きが大きく、感情のしこりが残るケースも少なくありません。これから韓国語を勉強しようと思っている皆さん、そしてもうすでに韓国語を勉強している皆さん、言葉の勉強だけでなく、その裏側にある文化についても関心を持ってください。文化の違いに気付き、それを楽しむことができる余裕を身に付ければ、あなたも立派な「国際人」です。韓国は日本人にとって、また日本は韓国人にとって、国際感覚を磨く訓練をするのにもっともよいパートナーなのではないかと思います。

日本の皆さん、さあ韓国語の世界へようこそ。アンニョンハセヨ？

同音のことばと吉祥

文　学　部
臼　田　真佐子

2004年の初夏、学会で天津・南開大学を訪れる機会がありました。中国の大学は朝８時から始まるところが多いのですが、学会も例外ではなく、朝８時半ないしは９時頃から開始、夕方は５時過ぎまで続きます。やっと日曜の午前に終わり、午後はバスで見学。見学先が楊柳青の石家大院と聞き、年画の里とすぐ分かりました。年画とは中国の伝統的な民間の版画で、春節（旧正月）等に多く飾られるものです（詳しくは樋田直人『中国伝統年画の世界』、丸善、1995年、１-７頁参照）。

天津・石家大院の庭園

実際行ってみますと、石氏の風格ある邸宅が保存されて、天津楊柳青博物館として観光スポットとなっていました。『活着』（生きる）などの映画の撮影現場にもなったそうで、何の映画用だったのかメモするのを忘れましたが、お嫁入り用の輿も展示されていました。そういった赤い輿を以前いろいろな中国映画で見たことがありますが、赤い色が中国ではおめでたいとはいうものの、少々派手な感じは否めません。そして、別の室内に棗（なつめ）の実、栗、お箸などの品が展示してありました。中国語で「棗」は「早」（早く）、「栗子」は「立子」（子を立てる）、「筷子」は「快子」（速く子を）と同音で、これらの品々には子宝が早く授かりますようにとの祈りが込められています。このような同音、または発音が近いことばを中国語では「諧音」と言います。ここに挙げた例は、おめでたいものばかりです。ただ、日本人は棗や栗などについて、中国人のような発想はしません。なお、以下同音という場合は、中国語での場合を指します。但し、中国語の発音は中国語未修の方も考慮に入れ、今回はピンインで記すことはしません。

さて、天津楊柳青博物館は年画専門の博物館ではないので、年画の展示はあったのかどうか、切り絵展示は見ましたが、年画はおみやげとして購入して来ました。私が買った『中国・天津　楊柳青　木版年画』（天津楊柳青画社）はカード式の４セットで、歴史故事輯、世俗輯、仕女輯、娃娃輯からなっています。この中で、同音のことばに関係する絵は、娃娃輯に比較的多く入っています。娃娃とは小さな子供のことですが、年画に描かれた子供たちは独特の表情や体型をしています。この中から同音のことばに関係する年画を２枚選んでみましょう。

まず、「蓮年有余」には男の子と目の飛び出た魚、蓮の絵が描かれています。カードの裏に中国語で説明がありますが、日本語に訳すと次のようになります:「子供が魚を抱いているのは、楊柳青の年画で最も代表的な題材で、いろいろな異なった様式がある。」中国語では「蓮」は「連」と、「魚」は「余」とそれぞれ同音です。この点について、カードの説明には次のように書かれています:「蓮は連続して絶え間ないという寓意である; 魚は“富裕”“富余”という寓意である。すばらしいことを祈るという意味を含んでいる。」

そして、「玩蟈蟈」には手足のふくよかな男の子、キリギリス（蟈蟈）とその入れ物、白菜と大根が描かれており、カードの説明は次の通りです:「子供が手にキリギリスの入れ物を持っているが、キリギリスの方は彼の頭の上に飛び乗っていて、とても面白い。傍らには白菜と大根があり、秋の収穫の意味がある。蟈蟈は“哥哥”と音が近く、男の子を生む兆しを喩えている。」中国語の「蟈蟈」は地方によっては、「叫哥哥」とも言うようで、「哥哥」とは兄の意味です。男子誕生を尊ぶ考えが垣間見られるような気もしますが、それはさておき、子供が生ま

れることはおめでたいことです。

以上の年画については、著作権の関係で、ここに実物を挙げることはできませんが、樋田直人氏の著書をご覧になれば、「蓮年有余」については写真や解説が載っています(『中国の年画　祈りと吉祥の版画』､大修館書店、2001年、26頁、「連年有余」)。

年画は民間の版画ですが、文人画に描かれた題材にも、同音のことばと関係するものがあります。竹はその形状や生命力から尊ばれると思いますが、中国語では「祝」と発音が近く、ことばの点から言っても吉祥を表現しています。2004年の初夏、渋谷の松涛博物館で開催された「上海博物館展　――中国文人の世界」、これは友人のおかげで開催を知って見たのですが、この展覧会でも竹の絵が展示されていました。いまその図録（86頁、142頁）を見ると、それは清代の李方膺「風竹図」だったのでしょうか。また、2004年初秋には京都の泉屋博古館で「中国古代青銅器の世界」と「住友コレクションの中国絵画」という展覧会を見る機会に恵まれました。漢籍閲覧の帰りに駆け込んだ次第。絵画の中の一幅、明代の馮可宗「竹石図」には竹と石が描かれていました。「展示品リスト」の他に、私の走り書きメモしか手元にありませんが、“竹は発音が祝に通じ、寿石は長寿を意味する。吉祥画題。”というような説明が絵の傍に出ていました。竹はおめでたい画材であることが看取されます。

私は中国美術について専門的なことは知りませんが、何故かその魅力に引かれ、これまで記して来たことからもお分かりのように、しばしば博物館や美術館に鑑賞に出かけます。1998年東京国立博物館で開催された「吉祥　――中国美術にこめられた意味」を見た時、吉祥を表すいろいろな題材について知り、得るところがありました。300頁を超える図録には年画は含まれていませんが、「連年有余　――蓮と水禽と魚」の例として、絵画や陶磁器などさまざまな美術作品が挙がっています。また、「魚跳龍門　――立身出世の願い」には景徳鎮の壷「青花爵禄封侯図壷」も含まれ、その解説には次のように書かれています（図録246頁）:「喜鵲、鹿、蜂の巣およびサルの図。鵲は爵と、鹿は禄と、蜂は封と、サルを意味する猴は侯と発音が同じであり、爵禄封侯、すなわち諸侯に封ぜられ爵位と俸禄を得ることを意味する寓意文様である。」

それから「吉祥如意　――福は眼前に在り」には、やはり景徳鎮の壷「豆彩三多図双耳扁壷」があり、その解説においても発音が近いことばについて言及されています（図録269頁）:「仏手柑、桃、そして石榴が描かれている。仏手柑は仏の発音が福に近いことから福をあらわしている。桃は西王母の蟠桃が三千年に一度実を結び、これを食せば寿命が延びるという伝説により長寿を意味する。石榴は多数の種をつけることから多子を寓意している。この三種の果物の組み合わせは、多福多寿多男子あるいは三多とよばれる吉祥文様である。」私が天津で購入した年画にも「福寿三多」という絵があるのですが、三人の男の子がそれぞれ仏手柑、桃、石榴を手にしています。景徳鎮の壷とは趣が異なりますが、年画の方もそれなりに味わいがあります。

ある抽象的な概念、主に吉祥に関すること、それを同音の具体的なものに託して、絵画や陶磁器などに描く発想……　年画という民間の版画だけでなく、中国の美術作品においても巧みに取り入れられて来たことが分かります。

ところで、同音のことばが全部おめでたいとは限りません。1993年の夏約１ヶ月、北京語言学院（現在の北京語言大学）で中国語教師の研修を受けました。学内から出るタクシーは「雨燕」（アメツバメ）と言い、中国語では「語言」（言語）と発音が近いのですが、これは言ってみれば、しゃれことばの類です。それから、中国人は置き時計をプレゼントしないと言われますが、それは中国語では「鐘」（時計）と「終」が同音だからです。それでは、今回のお話もここで終えることにしましょう。

お嫁入り用の輿（石家大院）

国が違うと・・・

― タイの諺・格言から ―

非常勤講師（タイ語担当）
一　宮　孝　子

諺、格言といったよく使われる言い回しは、昔から多くの人々に言い伝えられてきただけあって、その国独特の雰囲気が感じられることが多いものです。それは、その国の風土、気候、文化、宗教など、様々なものの影響を受けているからでしょうが、その国の人にとっては当たり前でも、そうでない人は、多少驚かされることもあります。

今回は、タイ語の諺や格言を紹介します。タイはご存知の通り、東南アジアの国々の一つで、気候は年中日本の夏のような感じです。そのため、日本では珍しい南国の動物や、野菜・果物も豊富です。宗教は日本の大乗仏教とは異なる上座部仏教を信仰している人が最も多いと言われています。

前置きはこのくらいにして、タイの諺、格言を実際に見てみることにしましょう。ここではタイ文字と、その大体の読み方をカタカナ（タイ語の発音は少々複雑なので、カタカナそのまま読んでも通じないことが多いです。）を付けてみました。そして、各単語の意味も添えていますから、皆さんも訳を想像しながら読んでみて下さい。

①　動 物 編

タイの諺、格言には、次のように日本ではあまり登場しない動物も活躍します。そしてそれらのイメージは、タイも日本も同じ様なものでしょうか？
考えながら読んでみて下さい。

（1）เห็นช้างขี้ อย่าขี้ตามช้าง

（読み方）ヘン・チャーン（グ）・キー
ヤー・キー・ターム・チャーン（グ）

（単　語）見る・象・糞をする
（禁止）・糞をする・～に従って・象

これを訳すと、「象が糞をするのを見て、象のように（大きな）糞をしようとするな。」となります。つまり、「身の程をわきまえろ。」といったところでしょう。

（2）ขี่ช้างจับตั๊กแตน

（読み方）キー・チャーン(グ)・ジャップ・
タッカテーン

（単　語）乗る・象・捕まえる・バッタ

これを訳すと、「象に乗ってバッタを捕る。」ということです。つまり、「大げさな準備または装備をしているわりには、獲物は小さい。」ですね。

（3）ช้างตายทั้งตัว　เอาใบบัวมาปิด

（読み方）チャーン(グ)･ターイ･タン(グ)･トゥア
アオ・バイ・ブア・マー・ピット

（単　語）象・死ぬ・全～・身体
持って・葉っぱ・蓮・来る・被せる

これを訳すと、「象が丸々一頭死んでいるのに、蓮の葉一枚で覆い隠そうとしている。」

という意味です。つまりは、「大きな秘密や過誤は隠しきれるものではない。」ということです。そうですね、象は大きいですものね、蓮の葉一枚では到底隠し切れはしないですね。

（4）หนีเสือปะจระเข้

（読み方）ニー・スア・パッ・ジョーラケー

（単　語）逃げる・虎・出くわす・ワニ

この直訳は、「虎から逃げて、ワニに出くわす。」ですから、皆さん想像がつくと思います。日本語の、「一難去ってまた一難」にあたるものです。

動物編はいかがでしたか？日本では「カワイイ」というイメージが強い象もタイでは「大きい」とか「力強い」といったイメージの方が強いようですね。これもタイでは日常的に象と接しているからでしょう。また、虎とワニがどちらも「恐ろしい、怖い」というイメージは日本人にも充分理解できると思います。ただ、日本の諺や格言にはあまり登場しませんが・・・

ブーゲンビリアの花

② 果物・野菜編

次に、果物や野菜に関する諺、格言を少し紹介します。これも、日本とどう違うか、また、同じか考えてみて下さい。

（1）ง่ายกว่าปอกกล้วยเข้าปากเสียอีก

（読み方）（ン）ガーイ・グワー・ポーク・グルアイ・カオ・パーク・シア・イーク

（単　語）簡単な・(比較)・剥く・バナナ・入れる・口・～しまう・更に

直訳は、「バナナを剥いて食べるよりもなお簡単な。」という意味です。つまり、「凄く簡単。」ということです。「そんなの朝飯前さ！」と、日本人なら言うところでしょうが、タイではバナナは安く、どこにでもあるので、こういった表現になるのでしょう。

（2）เล็กพริกขี้หนู

（読み方）レック・プリック・キー・ヌー

（単　語）小さな・唐辛子・糞・ネズミ

これは、「小さなプリックキーヌー（ネズミの糞ほど小さい唐辛子で大きい唐辛子よりも辛い。)。」という意味で、日本では、「山椒は小粒でピリリと辛い。」でしょうか。日本の山椒はタイでは唐辛子に例えられるのですね。

（3）กบในกะลาครอบ

（読み方）ゴップ・ナイ・ガッラー・クロープ

（単　語）カエル・中・椰子の殻・半分

これは、「椰子の殻（半分）の中のカエル。」つまり、日本の「井の中の蛙大海を知らず。」です。カエルは同じなのに、日本では「井戸」、タイでは「椰子の殻」というところがお国柄を表していると思いませんか？

（4）ผักชีโรยหน้า

（読み方）パックチー・ローイ・ナー

（単　語）香菜・ふりかける・表面

これは、「表面に香菜をふりかける。」という意味です。ここの香菜（パックチー）は、タイ料理には欠かせない野菜です。かなり癖のある香りがするので、日本人には苦手な人も多いのですが、タイ料理では、日本料理の刻んだネギのように、頻繁に使われます。つまり、このフレーズの意味は、「表面だけをつくろう。」または、「目先だけを飾り立てる。」ということになります。なんとなくお分かりいただけるでしょうか？

このように、諺・格言に登場する野菜や果物も、タイと日本では違っていて面白いですね。

タイの果物屋にて

③ 番 外 編

ここで、番外編として、タイ人にとって重要な行動に関する諺・格言をひとつだけ紹介したいと思います。

（1）หน้าไหว้หลังหลอก

（読み方）ナー・ワイ・ラン（グ）・ローク

（単　語）前・合掌する・後ろ・欺く

これを訳すと、「面と向かっている時は合掌し、裏にまわると欺いている。」ということになります。この「ワイ（＝合掌)」という行為は、タイでは日本のお辞儀のように、礼儀正しさや、敬意の度合いを表す重要なものです。合掌する手の合わせ方や高さで、礼儀正しさや敬意の度合いも変わってきます。これを日本の諺・格言に当てはめるのは難しいですが、偉い人の前ではペコペコして、その偉い人がいなくなった途端に、その人の悪口を言い始めるような人は日本にも居ますよね。感じが悪い人ですね。

いかがでしたか？国が変わると諺、格言やよく使われる言い回しに登場するものも変わってきます。言いたいことは似ている場合が多いのですが、タイ語の方が日本語よりも具体的表現しているように感じませんでしたか？　今回のお話で、少しでもタイ(語)に興味を持ってもらえれば嬉しいです。

英語の発想

経済学部
三　川　克　俊

０．ストレートかあいまいか

英語を学習したことのある人なら誰しも、「英語を母国語とする人ははっきりストレートに物を言い、日本人は逆に曖昧さを好み、遠慮がちに物を言う。」というようなステレオタイプ的な文章や発言に出会ったことがあると思います。もちろんこれはすべての英語を母国語とする人にあてはまるわけではなく、日本人にもはっきりずけずけと表現する人もいます。しかし、おおまかな傾向として上記のような印象を強く持っている人が多いのではないでしょうか。英語の発想を考えるにあたって、日本語の発想と対比して考えてみることは大切なことです。以下少し詳しく英語の発想を日本語と比較対照しながらみていきましょう。

１．情報構造の違い（演繹型か帰納型か）

話し言葉あるいは書き言葉には大きく分けて、演繹型と帰納型という二つのスタイルがあります。演繹型というのは結論を最初に述べ、それから説明や理由などを加える、というスタイルです。逆に帰納型というのは最初に説明や理由を述べ、最後に結論を述べる、というスタイルです。場面や状況によってもちろん異なりますが、英語の発想としては大雑把に言って、前者の演繹型を用いることが多く、逆に日本語では後者の帰納型が用いられることが多いのです。これが冒頭で述べた「ストレートかあいまいか」の違いの原因です。これはともすると相互の誤解を招く原因になりかねません。簡単な例を考えてみましょう。アメリカ人教師と日本人の生徒との対話です。

Teacher: Mr.Suzuki, who is your favorite American author?
Suzuki: When I was twelve, I went to the United States with my parents. It was my first trip there.
Teacher: That's very interesting, but who is your favorite American author?
Suzuki: At that time, my brother was already a high school student.
Teacher: Thank you, Mr. Suzuki. That's enough. You have received a failing grade for today's class.

上記の対話ではなぜ鈴木君が落第点をつけられてしまったのでしょうか？鈴木君の英語はどこも間違ったところはありません。文法も発音も完璧です。しかし両者の間に誤解が生じてしまいました。この場合、アメリカ人教師は、当然結論から先に言う演繹型で答えが返ってくると予想していたわけです。ところが、鈴木君は無意識に最初に理由や説明を述べる帰納型の返事をしてしまったことが原因です。これがアメリカ人同士の会話だったらどうなるでしょうか？

Teacher: Mr. Smith, who is your favorite American author?
Smith: Mark Twain.
Teacher: Why?
Smith: Because I went to Missouri when I was twelve years old with my parents. My brother was already a high school student, and he told me about Mark Twain. So when I saw where he had grown up, I became very interested.

スミス君は結論から先に述べる演繹型で返事をしており、理由や説明を後から付け加えています。上記の鈴木君もスミス君と同じようなことを言いたかったと思いますが、なかなか結論を言おうとしなかったために、質問が理解できないのか、あるいは意

識的に答えをはぐらかそう、としているのかなどと誤解を受けてしまったわけです。鈴木君はいきなり答えを言うのはぶっきらぼうで失礼だと考えて、理由や説明から入ってしまったわけですが、これが日本語での会話であれば、誤解を受けることはなかったでしょう。日本語では逆に、結論や用件を先に述べるのは特に相手が目上であれば避けられるのが普通です。日本人の感覚からすれば、上記のアメリカ人教師は最後まで人の話を聞かないせっかちな人間だと思われるかもしれませんが、お互いに自分の思考と発想というものは無意識ですから、このような誤解を招いてしまったわけです。

日本語の発想では、特に相手によって自分の結論を言わなくても相手に察してもらったり、あいまいにしたり、極端な言い方をすれば、相手と意見が異なるようであれば、話の途中で結論を相手に合わせてしまうことも可能です。昔から「以心伝心」という言葉があるように、言葉に出さなくても相手にわかってもらえる、というのが「大人」であると考えている日本人は多いと思います。しかし、このような話し方をすると特に英語で話す際には、上記の会話例のように誤解を招く可能性がある、ということは覚えておく必要があります。

とはいっても、英語国民はいつでもどこでも誰に対しても「演繹型」を用いるわけではありません。特に相手の要求を断ったり、相手に過大なお願いをしたり、相手を傷つけるようなことを言わなければならない場合、「帰納型」のほうが都合がいいので、はじめに理由や説明からはいり、いよいよ話の核心にもっていく、というやりかたもよく用いられます。

以上のような話し方のスタイルの違いは当然、書き言葉にもあてはまります。英語の書き言葉では、はじめにトピックセンテンス（主題文）がくるのが普通で、それを説明したり例証したりする支持文が続き、最後には主題文を結論づける文章がくるのがふつうです。これは主に演繹型のスタイルで、新聞などでは逆ピラミッド型とも呼ばれ、見出しを読めば、大体の情報がつかめるようになっています。このスタイルに慣れることは、Ｅメールがグローバルコミュニケーションに必須の通信手段となっている現在では、ますます重要になってきます。要点がなかなかわからないＥメールは最初の数行を読んだだけで、削除されてしまうかもしれません。

２．言葉の量と沈黙の意味の違い（沈黙は金？）

日本語では「沈黙に語らせる」などという言葉があり、教室においても学生は授業中、先生の話をじっと黙って聞いているのがふつうで、質問などがあれば授業が終わってから個人的に先生に質問することが多いと思います。これが英米の学校であると、講義形態の授業は別かもしれませんが、学生も活発に質問をし、先生に議論をふっかけたりすることもあります。これは黙っていると自分の意見がないか、あるいはその話題に関しては関心がない、あるいは無知である、などと受け取られてしまうからです。日本人の発想からすれば、大人になればなるほど、いちいち議論をするのは大人げない、ということになるのですが、英語の発想では沈黙を嫌います。それが言葉の量の違いにもつながります。日本人が黙って考えている間に、英米人に言葉を矢継ぎ早に浴びせられて辟易してしまうことはよくあります。沈黙がとにかく嫌いなのです。

しかし、この言葉の量についての問題は非常に個人差や地域差、または男女差や年齢差というものによっても左右されることは覚えておく必要があります。デボラ・タネンというアメリカの言語学者は、ニューヨークを中心とする東海岸のアメリカ人とカリフォルニアを中心とする西海岸のアメリカ人との会話を比較しました。それによると、ニューヨーカーのほうがマシンガンのように早口でまくしたてることが多く、カリフォルニアのアメリカ人はそのペースについていけず、話の途中でさえぎられてしまうことが多かったそうです。それでもやはりこのカリフォルニアのアメリカ人が日本人と英語で仮に話をしたとすれば、日本人のほうが外国語としての英語のハンデもあり、日本人のほうが途中でさえぎられてしまうことが多かったことでしょう。

３．言語の相対性（コミュニケーション調整能力の必要性）

以上、簡単に英語の発想を考えてきましたが、必ず覚えていてほしいことは、「ステレオタイプは危険である」ということです。例えば、単純に「英語はなんでもストレートに結論を先に言えばよい」と信じてしまうと、状況によっては相手に非常にぶっきらぼうで失礼な印象を与えてしまうことがあるということです。これは実際に私がイギリスの大学で学んでいたときに指導教官から聞いたことですが、同じ日本人の留学生がいきなり部屋に入ってくるなり、プリントを指して "Can I have this？ "と言われ、驚いたそうです。これは日本語の感覚で言えば「これちょうだい。」と言っているようなもので、やはり目上の相手にものを頼む場合はそれなりの前置きとそれに即した表現を使わなければなりません。これは英語力の問題もありますが、英語を母国語とする人の会話をよく観察し、どのような表現をどのような状況で用いるのが最も自然で適切なのか、を絶えず考えていることが必要です。

また、覚えておかなければならないのは同じ英語といってもアメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、さらにはシンガポール英語やインド英語といったアジアの英語といったいろいろな英語があるということです。そこには「英語の発想」とひとくくりにするにはあまりに複雑な違いがあります。性格の違いや個人差、男女差も当然存在します。英語を母国語とする人の中にも典型的な日本人のようにふるまい、かつしゃべる人もいますし、日本人の中にも典型的なアメリカ人のようにふるまい、かつしゃべる人もいるのです。英語を使って異文化コミュニケーションを行う場合も、日本語を使って日本人同士でコミュニケーションを行う場合も、誤解が生じている、と思ったらやはり言葉を使って相手の誤解を解くように説明しなければなりません。日本語と英語の発想の違いはあっても、最後にはこのコミュニケーション調整能力が一番大切なことだと思います。

日本語の発想

― 心の距離をスイッチング ―

国際コミュニケーション学部
山　本　雅　子

私たちは日頃何気なく言葉を使っていますが、よく考えてみると言葉のはたらきとは実に不思議なものです。このことは、母語を使っているかぎりなかなか気づかないのですが、外国語を学ぶと痛切に感じさせられることです。そこで、日本語について考える手がかりとして、日本語を外国語として学習する人にとって理解しにくい表現を取り上げ、その理解しにくい原因を考えることによって、日本語の姿の一面を見てみたいと思います。

日本語学習者に、日本語のどのような表現が難しいかと尋ねると、きまって返ってくる答えに、敬語表現と授受表現があります。敬語表現とは尊敬、謙譲、丁寧を表すというあのおなじみの表現で、授受表現とは「あげる」「くれる」「もらう」という表現です。これらの表現は、日本語教育では待遇表現と呼ばれ、話の＜場＞に応じて使い分けなければならない表現とされています。では、＜場＞によって使い分けるとは一体どうすることでしょう。

まず敬語表現から考えてみます。「敬語表現」についていえば、面白いことに、学習者は初級レベルのうちはさほど難しいとは思わず、レベルが上がるに従ってその困難さを実感するようです。これは、初級レベルでは練習が先生と学生というような明白な上下関係に絞られているため、上下関係という単純なメカニズムのなかで使用すれば良いのに対し、レベルが上がるにつれて複雑な場面設定がされることが原因となっています。

では、敬語表現を適切に使うためには、上下関係のほかに何が要因としてはたらいていると考えればいいのでしょうか。ここに、日本社会の特徴としてしばしば言及されるウチ、ソト関係が関与してきます。例えば、会社において、社内で上司に対して部

下が敬語を使うのは上下関係からくるもので、これは分かりやすいでしょう。しかし、一方、会社のソトの人に対しては上司のことを「ただいま、課長の田中は席をはずしております。」というように謙譲語で表現しなければなりません。この場合は、上司を同じ会社の人間である、つまりウチの人間であると意識化し、顧客を会社のソトの人と意識化するという、ウチ、ソト関係で捉えているのです。では、何故ウチ・ソト関係にも敬語を使うのでしょうか。

上下、ウチ・ソト関係は、べつべつのものとして考えられがちですが、両者は、それぞれを統括する広い視野から捉えなおしてみると、とりもなおさず、話者を基点とした心的距離の相違を表しているといえます。「課長、次はいつニューヨークへいらっしゃいますか。」といった、相手を高める尊敬語では、話し手は課長を高めることによって課長と自分との間に心的距離を作っています。一方、「課長、荷物をお持ちします。」といった謙譲語では、話し手は自分を低めることによって課長と自分との間に心的距離を作っているのです。

つまり、上下という位置関係を構成する空間領域こそが敬語の本質であり、＜場＞に応じて使い分けるとは、この心的距離を近づけたり、遠ざけたりとスイッチングさせることなのです。こういった心的距離のスイッチングが会社のウチの人間とソトの人間との関係においても、上下関係と同様にはたらくのです。

さらに、こういった心的距離のスイッチングは、会社などという特定の環境だけでなく、われわれの日常茶飯となっています。それが、「食べる」と「食べます」という動詞の普通体と丁寧体の使い分けです。仲の良い友達に「今日のお昼、何食べますか？」と聞かれたら、今日はこの人、どうしたんだろうと怪訝に思うでしょう。一方、あまりよく知らない人に普通体で話しかけられると、なにか馴れ馴れしい印象を受けるでしょう。このように、普通体と丁寧体のあいだでも、敬語の場合と同様の心的距離のスイッチングが作用するのです。ドラマなどを見ていて、恋人同士がいつもは普通体で会話をしているのに、けんかをした場面では丁寧体に変わることがあるのに気づいたことはありませんか。言語使用のプロである小説家や脚本家は実に効果的にこの心的距離のスイッチングを活用しているのです。

また、このような心的距離のスイッチングによる使い分けは授受表現の「くれる」「あげる」も同じです。「佐藤さん(A)が加藤さん(B)に本をあげた。」も「佐藤さん(A)が弟(B)に本をくれた。」も、(A)から(B)への本の移動という状況においては同じですが、「くれる」は話者が(B)を心的に近い関係であるとみなした場合に使われます。一般には家族が該当します。もちろん、最も話者に近い関係にある話者自身が(B)に該当することは言うまでもありません。一方、「あげる」はその逆で、心的に近い距離にあるとみなした人には使われません。このように、「くれる」と「あげる」の使い分けは、(B)に対する話者の心的距離の遠近が基準となっているのです。

一般には目の前の距離によって区別されると思われているコソア表現にもこういった心的距離操作は反映されています。同じ状況がコでもソでも言い表せることに気づいたことはありませんか。文章を書いているときなど、「これ」と言って前の事柄を指示しようか、「それ」と言って指示しようかと迷ったことが誰しもあると思います。また、「あそこはねえ」などと、自分の知らない場所をアで指示されて、一体どこのことだったっけ、と慌てて記憶を辿ったことがあるのではないでしょうか。こんな経験が教えてくれることは、コソアが目の前の距離の指示とは別の何かによって操作されているということでしょう。ここでは、その答えが心的距離だということだけに留めておきますので、どういった心的距離であるかは、一度自分で考えてみてください。

日本語には、心的距離によって操作される言語表現が多く、上に挙げた以外にも枚挙に暇がありません。日本語の大きな特徴といえるでしょう。心の距離というような、外からは全く見えないところでの操作による表現の使い分けは、日本語を外国語として学ぶ人たちには非常に分かりづらく、なかなか適切に使えるようにならないのは無理もないことです。しかし、こういった目には見えないところではたらくメカニズムを理解し、自分のものとしていけば、いつかは母語話者のように巧みに日本語を操ることも不可能ではないでしょう。

ドイツ語と日本語の発想の違いについて

国際コミュニケーション学部
新　形　信　和

ドイツ語の文章を読んでいると日本語とはずいぶん違うなあと思うような表現に出会うことがよくあります。今回はそのような具体的な例を一つとりあげて、違いのありかたについて考えてみたいと思います。まずドイツ語の文章をあげてみます。

Beide schauten sich tief in die Augen.

二人の男女が互いの眼を見つめ合っています。そして二人は恋に落ちるという場面です（もちろん、愛し合う二人が互いの眼を見つめ合うという場面であってもいいでしょうが、テキストでは、見つめ合うほうが先になっています）。これを日本語に訳すとどうなるでしょうか。

直訳式に訳してみても日本語にならないのです。原文は、二人の視線が互いの眼のなかに深く入っていくことを表現しています。「二人は互いの眼（のなか）を」、「深くのぞきこんだ」、「深く見入った」、「深く眺め入った」とやってみても、日本語になりません。この場合、日本語では、「二人は互いの眼をじっと見つめ合った」というのではないでしょうか。日本語にも「眼のなかをのぞきこむ」といういいかたはありますが、恋に落ちるときの二人が「のぞきこむ」ことはしないのが普通です。

ドイツ語と日本語の表現の違いは「深く」と「じっと」にあります。つまり、視線が相手の眼のなかに「深く」入っていくのか、それとも、相手の眼から視線をそらさず見つめ続ける（「じっと」）のかの違いです。

西欧文化は正視する文化であり、日本文化は正視しない文化であるとよくいわれます。そのとおりだと思います。西欧人が相手の眼をじっと見つめるのにたいして、日本人は特別の場合をのぞいて相手の眼を見つめることをしません。知らない人の眼をうかつに見ると、眼（がん）をつけたといって因縁をつけられかねません。眼をみつめる特別の場合というのは、一つは喧嘩する場合です。相手をにらみつけなければ喧嘩になりません。日本の国技である相撲という格闘技では、行司が「見合って見合って」といって闘争心を煽ります。もう一つの場合が恋人同士の場合です。ひたすら相手の心に関心がむかっているとき、二人はじっと見つめ合うのです。

すると、こういうことになります。すなわち、西欧人はひたすら相手の心に関心がむかっているときに、相手の眼のなかを深く見つめようとする（視線が相手の眼のなかに深く入っていく）のにたいして、日本人は相手の眼から視線をそらさずじっと見つめ続けるということです。いいかえますと、西欧人にとっては眼に深さ（奥行）が存在するのにたいして、日本人にとって深さ（奥行）は問題にならないのです。このような視線のありかたの違いは奥行をもつ西洋画と平板な感じがする日本画の違いとも密接に関連しています。この違いは絵画全般についていえることですが、ここでは眼に奥行きがあるかないかを話題にしているわけですから、その具体例を一つだけとりあげて比較してみましょう。

（図1）　自画像（デューラー）

ルネサンス時代のドイツの画家デューラーが1500年に描いた有名な青年時代の自画像（図１）があります。その眼は実に細かくリアルに描かれています。何ものかを希求する心、何事かを成しとげたいという野心、不透明な未来にたいする漠然とした不安、未知の自分を見定めようとするひたむきな内省的な眼差し、青年特有のかすかな倦怠感などなど、この眼のなかにはあらゆるものが描きこまれています。

日本の絵画の例として浮世絵をとりあげてみます。例えば、喜多川歌麿の三美人の絵（図２）があります。これは一枚の絵のなかに三人の理想的な美人が描かれているものです。三人の眼はただの点にすぎ

ません。眼は三人とも同じで、大きすぎず不細工でもないかわいい眼がついているよ、そして、閉じているのではなく開いているよ、ということを表現しているにすぎないのです。ルネサンスの時代に西欧において人間の個性というものがはじめて成立したといわれます。デューラーから300年も後に描かれたものでありながら、三人の美人それぞれの個性は問題とはなっていないのです。現代でも日本画においては事情は変わってはいないでしょう。この話の先を続けたいのですが紙数が足りません。また別の機会に述べることにしたいと思います。

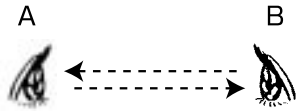
（図２）　高名三美人（歌磨呂）

さて、正視する西欧文化においては眼に奥行が存在する、正視しない日本文化では奥行は問題とならないという話の続きです。この違いはどのようなことなのでしょうか。挨拶をとりあげて考えてみましょう。日本人は朝、出会った人に「お早ようございます」といって頭を下げます。ドイツ人は“Guten Morgen!”といいながら相手の眼を見ながらにっこり笑います。日本人とドイツ人はこのとき、それぞれのことばで何を表現しようとしており、しぐさで何を表現しようとしているのでしょうか。挨拶なんて人間同士のたんなる潤滑油であって、意味などないのだ、あるとしても、いちいちその意味など考えて行っているのではないという人もいます。しかし、本来はそれぞれの文化に根ざした意味をもっているはずなのです。いちいちその意味を考えながら行っているわけではないのは確かです。ですから、「お早ようございます」といって頭を下げた日本人に、今あなたはどのような意味のことをいって、なぜ頭を下げたのですかと聞いても答えに窮するでしょう。

それぞれの挨拶（ことばとしぐさ）は何を表現しているのでしょうか。図を使って説明します。

（図３）はドイツ人の挨拶です。“Guten Morgen!”

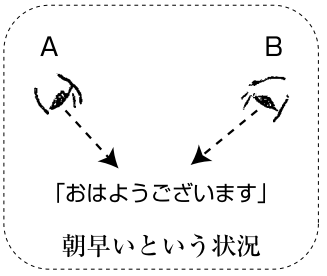
（図３）



“Guten Morgen!”

は日本語に訳すと「良い朝を」（直接目的格）となります。背後に、私はあなたに願っています、という省略された文脈がかくれています。そういう気持ちを伝えたくて相手の眼をじっと見るのです。にっこり笑いながら。私はこちらにいて、相手は私の前にいます。このようにして、私と相手とは互いに自分の気持ちを伝えようとするのです。ですから、そのとき相手から眼をそらしているというのは失礼にあたるわけです。

（図４）



（図４）は日本人の挨拶です。「お早ようございます」というのは、朝早いですね、という意味でしょう。そういいながら、頭をさげる。つまり、相手から眼をそらし、相手を見ないようにするのです。お互いに。眼の前にいる相手は見えなくなって視界から消えます。そうすることによって、相手の前にいて相手を見ていた私も消滅します。そこに存在するのは、朝早い（早い朝）という状況だけです。私と相手は互いにこの状況のなかに溶けこんで一体となります。このようなしかたで調和するのが日本人の挨拶です。そこには私という個（人）、あなたという個（人）は存在しません。それぞれの個を消して一体となって調和する、これが日本人の挨拶です。

挨拶というのは人と人との出会いを定める基本的な交わりの儀礼です。私たちはここにそれぞれの文化の人と人の関係のありかたの基本を見てとることができます。「深い」と「じっと」という、恋におちる（あるいは、おちた）二人の眼差しのありかたの違いは、ですから、挨拶の違いのなかにも当然見いだすことができるのです。

フランス語らしい表現

国際コミュニケーション学部
高　橋　秀　雄

フランス語らしい表現と言われてすぐ思いついたのは、《ノン Non.》である。《Non.》は、日本語の否定、拒否の表現「いいえ」「ちがいます」「だめよ」などに相当するが、ことばを聞いて受ける印象は、これらとはずいぶんちがう。鼻子音ｎに奥舌鼻母音がついた１音節の語１語にすぎないのに、表現としては、否定の意味だけを抜き出したような趣きがあり、これで完結している。響きも、メッセージも、なにかしら重い。

《Non.》の思い出をひとつ。私がはじめてフランスに行ったのは1976年で、もう28年も前のことになる。愛知大学に赴任して２年目で、日本全国のフランス語教員のなかから毎年夏に20名ずつをフランス語教育法の研修のためにフランスに派遣する制度があって、これに応募したのだ。私は、そのときフランス語をはじめて18年がすでに経過していたが、この制度のおかげでようやく夢の地に実際に足で立つことができた。

費用は、行きの航空運賃は日本政府が、帰りの航空運賃と２ヶ月分の滞在費はフランス政府が、出してくれた。ドゴール空港に着くと、フランス文部省の女性の係の人が一人ポツンと立っていて、われわれ研修生は一人ずつ封筒に入った１ヶ月分の滞在費1000フラン（当時のお金で、７万円くらい）を渡された。マイクロバスでパリ市内まで運ばれ、私たちはソルボンヌの近くで下ろされた。私は近くに銀行（BNPだったと思う。）をみつけたので、早速いただいた滞在費の紙幣の１枚を小銭にしようと思い、ずんずん入っていった。いつもの私に似合わぬ積極性だ。その支店は、私の銀行に対して抱く先入観からすると、意外に狭く、なによりも殺風景で、陰気な印象を与えられた。若い男性の行員が一人、並んだ客の一人一人の要求に応えて、黙々と仕事をこなしていた。私の番になり、彼は私の方に目を向ける。私は紙幣を１枚差し出して言った。「小銭に替えていただきたいのですが。」彼は真直ぐ私をみつめ、ひとこと、《**Non.**》それだけで、あとは取りつく島もない。私のフランスにおける最初のフランス語会話は、あっけなく終わった。

銀行の営業の仕方の日本の場合との細部の違い、さらには、生活のなかでのフランス人のお金に対する、あるいは現金に対する考え方などは、実際の体験のなかでその後徐々に知ることとなるが、この《**Non.**》という表現に典型的に見られると思われるが、コミュニケーションの明確さを強く求めるフランス人の傾向に気づいたのは最近のことである。フランス人にとって、社会生活において、また人間関係において、正確に、明晰に、わかりやすく伝えることの重要さは、私たち日本人にはなかなか理解できないものなのではないか。そしてそうしたかれらの意志は、フランス語の何でもない表現のなかにあらわれているのではないか。

《ム・スュー **Monsieur.**》《マ・ダム **Madame.**》という、人に呼びかけるときの語の重要性に気づいたのも最近のことである。たとえば、町ですれ違った見知らぬ人が何か落としてそれに気づかずに通り過ぎたときに、あなたは何と声をかけるだろうか。「おじさん！」あるいは「おばさん！」とは、にわかには呼びかけにくい。「落ちましたよ」などのメッセージを送る前になんとかその人を振り返らせようとして、「もしもし」とか、「あっ、ちょっと」とか、ことばを探して少し躊躇する場面を経験したことはないだろうか。そんなとき、フランス語ならまことに便利だ。男性には《**Monsieur.**》女性には《**Madame.**》と、呼びかけのことばが自然に口から出てくる。こうして、コミュニケーションの端緒が難なく開かれる。

この便利さは、どう考えればよいだろうか。気をつけて観察すると、フランス人は概ね、人に話しかけるとき、相手の顔を正面から見て、相手が自分のことばを聴く姿勢を取っていることを確認して、それからしっかり声を出して話す。話し相手とコミュニケーションの態勢に入ることに対して気を配る、並々ならぬ意欲がそこに見てとれるのだ。話し相手に注意を喚起する呼びかけ表現である《**Monsieur.**》

《**Madame.**》は、この意欲をよくあらわす。

話しことばにおける、この相手の注意を促すことの重視は、《セ～ **C'est ~.**》(指示代名詞 **ce** + 動詞 **être** ３人称現在)「それは～です」という表現の多用にもあらわれている。「おいしい！」「きれい！」をただ形容詞をポツンと出して、《ボン **Bon.**》《ジョ・リ **Joli.**》とも言うが、むしろ《セ・ボン **C'est bon.**》《セ・ジョ・リ **C'est**》と表現するのだ。《カン **Quand?**》「いつ？」《ウ **Où?**》「どこで？」などの疑問詞のついた表現も、《セ・カン **C'est quand?**》《セ・ウ **C'est où?**》と言う。**C'est ~.**がコミュニケーションの流れを作ってもいるし、また、「○○のことですが、それは～」というように、聞き手の注意を話題に惹きつける働きもしている。

ことわざ「時は金なり」は、英語では《**Time is money.**》だが、フランス語では、《ル・タン、セ・ドラル・ジャン. **Le temps,c'est de l'argent.**》と表現される。「時間というのはね」と言って一息入れて、「あれはあなた、お金ですよ」と言われているような感じだ。

C'est ~.は話しことばだけでなく、書きことばにもよく出てくる。パスカルの断章「人間は考える葦である」の文章においても、**C'est ~.**が印象深く使われている。

L'homme n'est qu'un roseau,
ロム　・　ネ　・　ケン・ロ・ゾ
人間は葦にすぎない。
le plus　faible　de la nature,
ル・プリュ・フェ・ブル・ドラ・ナ・テュル
自然のなかで最も弱いものだ。
mais c'est un roseau pensant.
メ・　セ・　テン　・ロ・ゾ・パン・サン
だが、それは考える葦だ。

ゆっくり味わいながら何度か音読してみると、《**mais c'est ~**》「だが、それは」の部分がここでは、簡潔・明快な文章に絶妙の音楽的バランスを作り、読み手の想像力を軽々と飛翔させるのだ。

音読と言えば、私が大学院生のころ５、６年間通った、小林英夫先生の授業のことが思い出される。先生は私たちにゲルマン言語学やロマンス語言語学の手ほどきをしてくださったのだが、毎年異なるテクストを使われる。「今年はこれを読もう」というふうにおっしゃって、ある年はイタリア語で書かれたスペイン語史、ある年はドイツ語で書かれたロマンス語語彙史、またある年はドイツ語で書かれたアイスランド語文法を取り上げ、われわれ受講生にそれらを一行一行音読・解釈させながら、授業を進められた。ヨーロッパのたくさんの言語をマスターされた先生は、少し乱暴のようにも思われるが、よく短い一言でさまざまの言語の特徴を説明された。その中に、「ドイツ語は目の言語、フランス語は耳の言語」というのがある。ドイツ語はテクストをじっと見つめているとわかるが、フランス語はそれではだめで、声を出して読み上げると頭に入ってくる、というのだ。この「耳の言語」というのも、フランス語らしい表現」を考えるのに心に留めておいてよいことばであるように思われる。

意見、申し出、要求に否定、拒否の意志を示すとき、《**Non.**》ひとことで済ますことが多い、人を呼びかける一般的な、いわば無色の表現《**Monsieur.**》、《**Madame.**》が自在に使われる、また、提示したことばが聞き手に届いたことを確認するかのように時間を置き、これを《**C'est ~**》によってつぎのことばにつなぐ表現が多く見られる、さらに、耳で聞かれる、声に出して読まれる特質がある、…「フランス語らしい表現」を語るのに、このようなことを例として挙げたが、結局のところこれらは、フランス語自体がもつ特質というより、フランス語を使う人たち、使ってきた人たちが自分たちの言語に対してもつ考え方の特質というべきだろう。

フランス人の考え方の大きな特徴の一つは、かれらが個人的にも、社会的にも、言語によるコミュニケーションにこの上なく気を配っていることである。フランス語を学ぶ私たちはつねにこのことを忘れてはならないと思う。それは、けっしてむずかしいことではない。心がけることは、受信者としては、発信者の発する音声、テクストを、そのメッセージを深いところで正確に受け取ることを目指して、しっかり聞き取り、読み取ること、発信者としては、受信者にできるだけ間違いなく自分のメッセージが受け取られるように、正面から相手の目をみてきちんと話しかけること、平明、明晰な文を書くこと、これにつきる。リヴァロル **Antoine de RIVAROL** (1753-1801) の有名なことば、**Ce qui n'est pas clair n'est pas français.** ス・キ・ネ・パ・クレル／ネ・パ・フラン・セ.「明晰でないものは、フランス語的ではない」を以上のような主旨で受け取りたい。

ロシア語の発想

経済学部
清　水　伸　子

ある言語を勉強し始めると、『なんでこんな変な表現があるのかな？』『どうしてこんな発想するのかな？』という思いをすることが度々あるはずです。よく考えてみると日本人にとってそれほど違和感のないものもありますが、中には『理不尽！』とその存在を許せないものもあります。そういうものは、語学教師に何度直されても、脳が理解するのを拒否しているかのように、学習者は間違いつづけます。さて、今からここで紹介するロシア語の発想はどうでしょうか。

１．生き物か否か？

ロシア語の基本文法事項の一つに、名詞のグループ分け（名詞の性）がありますが、英語しか勉強したことのない学生は、この『名詞がグループに分かれる』ということが何となく理不尽で『何で分けなきゃいけないの？面倒くさいから一緒でいいじゃん！』といった感じでピンとこないようです。そこで『日本語も名詞のグループ分けがあるよ』と言うと、みんな目がテンになります。文法における名詞のグループ分けは、ある状況下で名詞によって振る舞いが異なるという事実を反映したものです。誰か偉い学者が分けたいと思ったから存在しているわけではないのです。ただし、ネイティブ・スピーカーは、その振る舞いの違いをいちいち意識せずに、頭の中で自動的に処理して正しい文を作っています。だから、日本人自身はなかなか気がつかないのです。

さて、話を戻しましょう。実は日本語は名詞が生物か否かという発想が必要な言語ですが、このことはロシア語にも当てはまります。日本語では、生物か否かという発想は存在文で必要となります。「お金がある」はいいが「犬がある」とは言いません。ロシア語では、直接目的語で生物か否かの発想が必要となります(*1)。日本語では共に「～を」を名詞に付けて直接目的語を表示しますが、ロシア語では「大学は・が」「学生は・が」は университет, студентと、共にＴという音で終わるのに、「大学を」「学生を」となると университет, студентаと、最後の音はＴ／ａと変えなければなりません。

ただし、日本人とロシア人ではこの発想に対する感覚に少し違いが見られるようです。「生物か否か」は日本語ではほとんど揺るぎないのですが、ロシア語ではちょっと悩ましい場合があるのです。それは、通常生物を指す名詞なのに無生物を指す場合もあるという名詞です。例えば、ロシア語の「ミーシュカ」という語。これは、男の子ミハイルの愛称形（ミハイルちゃん、または熊の愛称：日本の犬に対する名前の典型「ポチ」に当たる）であると同時に、これは「ペコちゃん」に相当するような老いも若きも知っている大変有名なロシアのチョコレート菓子の名前でもあります。日本語では「なっちゃんがいる」と言う場合の「なっちゃん」は生き物（人間）で「なっちゃんがある」と言うと以前田中麗奈がCMに出ていたジュースを指しますが、ロシア語ではそうはいかないらしいのです。「（お菓子の）ミーシュカを」と言いたい場合、お菓子は無生物であるという発想からすれば「ミーシュキ(*2)」が適切な形となるのですが、ロシア人にとってはこの「ミーシュカ」自体が生物を強く連想させる語であるため、「ミーシェック(*2)」という生き物の場合の語形を使いたいという欲求があらわれ葛藤するようです。「どっち？」と詰め寄って無理に言わせようとすると、「ミーシ…」と語尾をうやむやにする始末。しかし、このロシア人の葛藤も少し分かるような気がするのです。例えば、ある人気芸能人の人形が新発売になると想像して下さい。人形なので無生物ですが、「上戸彩（美空ひばり）１つ下さい」は何となく気持ち悪くありませんか。日本語でも「…の人形１つ」と言うほうが落ち着くと思うのですが、どうでしょう。「生物か否か」は実は悩ましいのです。

(*1) 女性名詞の単数形はのぞく。

(*2) 複数形。

２．神の御心のままに

「私は～できます」「私は～しなければなりません」などの可能・義務・必要表現は、日本語で「～は・が」が付く（いわいる）主語を用いますので、ロシア語でも「ヤー(私は・が)」と言いたくなりますが、ロシア語では「ムニェー(私に)」を用いて「私にとって～することは可能（義務・必要）です」と表現します。英語でも "It's possible for me …" などの主格主語を用いない表現が存在するので、これらの表現で「ムニェー」を使用するのはまだ許せるかもしれません。しかし、ロシア語で「ムニェー」を用いて「私にラーメンが気に入っています」とか「私に20歳です。」としか言わないとなるとどうでしょう。ロシア語では、好き嫌いの表現や年齢表現でも主格主語を用いません。学習者はどうしても日本語や英語につられて「ヤー(私は・が)」と使ってしまう間違いを繰り返しますので、ロシア語の発想は違うのだという説明をします。このような表現に関して、ロシア語教師は『ロシア語では、自分でコントロールできない事柄は、まるで神様の力が働いて私達に降りかかってくるようなイメージで捉えているので主格主語を用いない傾向がある』と説明します。出来るか出来ないかは自分でコントロールできません。出来る人が出来ないふりをすることは可能ですが、それでもやはり出来る人は出来るし、出来ない人は出来ないわけです。好き嫌いも、好きになろうと思ったら好きになれるわけではないので、どうしても納豆が食べられない人がこの世にはいるのです。歳はとりたくないと思っても、誕生日は必ずめぐってきます。この他に、「私は眠い」は「ムニェー」を用いて、「私は寝たい」とは別の表現をしますし、「私はラッキーだ」も「ムニェー」を用いて「私に」と言います。くれぐれも神様を怒らせるようなことをしてはいけません。あなたに良くないことが起こるかも。

３．歩いて行くものは？

最後に、ロシア語の移動動詞についての話をしましょう。ロシア語では、動詞が移動手段によって細かく分かれていますので、移動を表現するときには、徒歩なのか、乗り物を使うのか、に注意を払わなければなりません。ロシア語の移動動詞で最初に教えられるのが「イッチー(歩く)」で、これは一番早く学習者が覚える動詞ですので、「ザーフトゥラ　タナカ　パイジョート(*3)　ヴ　イポーニユ（明日田中さんは日本に歩いて行くよ(帰るよ)」などと言ってしまい、ロシア人の友人に「歩いて帰るのは無理じゃない？」などと笑われることがよくあります。「いちいち徒歩かそうじゃないかで動詞が分かれて面倒くさいのが悪いんだよ。そう厳格に区別しなくても分かるでしょ！」と負け惜しみを言いたくなりますが、そこは「郷に入っては郷に従え」。ぐっとガマンして、こういう局面をやり過ごします。ところがロシア人は『ロシアから日本には歩いて行けない』などと突っ込むくせに、歩かないものでも「イジョーット」を用いることがあります。「アフトーブス　イジョート（バスが行く(来た)」「ドーシュチ　イジョート（雨が降っている)」「セイチャース　イジョーット　ガリー　ポッター(今、ハリーポッタが上映中)」などは、これ以外の表現のしようがないものです。『おいおいバスや雨や映画が歩くのか？』と思いつつも、これらは「イジョーット」の持つ直線的な移動のイメージが拡大して用いられているのだと寛大に考えれば、まだ許すことが出来るかもしれません。しかし、「ヴァム　イジョット　エータットゥ　ツヴェートゥ（その色はあなたに似合ってます。)」とか「トゥィ　スマー(*4) サショール(*5)（お前、気でも狂ったのか？)」という表現もあるのです。『っとに、ロシア語では何まで歩かせるわけ！！』と、腹が立つのは私だけでしょうか？

(*3)「歩いて出かける」の三人称単数現在形

(*4) 直訳では「知脳から」

(*5)「歩いて降りる」の過去男性単数形

アラビア語の語根と外交

国際コミュニケーション学部
鈴　木　規　夫

私は日本語すら覚束ない言語学習不得意者の一典型なのであるけれども、必要があってアラビア語を多少囓ってきた。この不器用な老齢のアラビア語学習者にとっては、日本におけるアラビア語学習環境がここ数年驚くべき進歩を遂げていることに、どうにも隔世の感を禁じ得ない。

みなさんよくご存じのように、ＮＨＫ外国語講座ではアラビア語が最近ではほぼ常設開講されている。番組展開にはいろいろ不安定なところもまだあるが、師岡カリーマ・エルサムニーさんの存在でたいていの問題は解決されてしまう。衛星放送では الجزيرة アル=ジャズィーラが毎日視聴できる。おまけに真新しいアラビア語－日本語辞書もお手頃価格で学習者を待っている。このような光景は、一昔前には想像できなかった。

どの言語でもある程度はそうなのであろうが、アラビア語学習者はある程度学習が進まないと辞書すら引けないというのは当たり前の話だった。多少コトバの仕組みが分かった気になってくると、未知の単語に出会った場合、まずともかくHANS WEHRのアラビア語－英語辞書で語彙探索を行わなければならない。それも目前の単語をまず子音３文字からなる語根（原型）に置き換えてから紐解く方式である。子音を基礎として母音は添え物というのがアラビア語やヘブライ語を中心とするセム語族の特徴であり（だから発音発話も私のように不器用な人間にとってはとても難しいのだけれども）、何れにせよこの語根がわからないとろくに辞書も引けないわけである。

たいていのアラビア語学習書にはまず記されていることだが、例えば、「書く」-KaTaBaの語根はKTBになる。そしてこのKTBの派生形はすべて「書く」ことに関連した単語で、受け身の「書かれる」はKuTiBa、「書く人、作家」ならKaaTiB、「本」はKiTaaB、「書く場所（オフィス）」はmaKTaB、「図書館」はmaKTaBat、と、語根KTBはすべてに共通している。MLKという原型は「所有する」という動詞で、語根KTBと同様に、派生形のMaLiKは「王様」、MaLiKaは「女王」、maMLaKaは「王国」とどんどんひろがりを持つ。KTBやMLKという基礎を押さえておけば、派生形は類推がきき、逆に派生形から語根の類推も可能になるというわけである。語根はすべてのアラビア語単語にあてはまり、その基本が分かればかえって都合がよく、言葉のイメージの連続性をまざまざと感じることができるそうなのだが、悲しいことにどうしたらその境地に達するのか、私には未だによく分からない。詩人の才能は、もっぱらこの音のイメージの連鎖を織り上げるところに現れるという。

ところで、E.サイードが指摘していることなのだが、帝国主義のイデオロギーとしてのオリエンタリズム的思考のもとにアラビア語学習を実施するプログラムには、学習されるべきこの語根のところに「殺す」などといったアラブの「残虐性」を喚起するようなものをふんだんに盛り込み、学習者にある種のマイナスのイメージを植えつける仕掛けを意図的に組み込む場合があるという。これはアラビア語の音のイメージの連鎖という観点に立つと、実に巧妙狡猾な学習システムなのである。

サイードはまた、「アメリカでは、アラビア語ができたり、アラブの膨大な文化的伝統について好意的な知識を持つこと」は、その音とイメージの織りなすアラブ的思考と感情に支配されることに繋がるので、イスラエルやアメリカを「脅すものと見なされるようになっている」のだという。語根によってさまざまなイメージを紡ぐアラビア語の世界には、それほどまでに根底的な力を秘めた何かがあるようだ。

実際、US国務省では80年代からアラビストに対するバッシングが始まり、以来ずっと彼らを排除、冷遇してきたので、イラクを占領するにも通訳がいなくて困っている現実がある（実は、日本でも同じようなことがあって、アラビストが日本の中東政策の立案決定過程に深く関わることはないのだが）。もっとも、占領者にとっても被占領者にとっても「通訳者は裏切り者」だと考えるのは特別なことではない。多くの言語を学ぶことは多くの人生を豊かに生きることであるという、どこにでも流布している格言は、USや日本の現代外交の舞台にはあまり適用されないのかもしれない……。

私の英語教授法 ―外国語学習の楽しさの復権―

経済学部　早　川　　勇

私は愛知大学に来る前は、専門の英語学だけ教えていました。純粋に英語だけを教えるのは15年ぶりくらいになります。愛知大学において３年間英語を教えてきましたが、現在も試行錯誤の状態です。

2004年度春学期において実践したことは、発音および音読の徹底と多読の指導です。私のなかでは両者は直結しています。それは、英語学習の楽しさを取り返したいという思いです。英語がうまく発音できたり、英語で書かれたお話しを辞書なしで読みきったときの感動を私は忘れません。英語を勉強するってこんなに楽しいということを味わって欲しいのです。今回は発音と音読についてのみ書きます。

次のような流れで半年間の指導をしました。

1．強勢と音調の規則を学び、練習する。
2．演説を暗唱し、大きな声で発表する。
3．心に残る英文を大きな声で読む。

この順番に簡単に述べます。

学生と授業をしていて特に気になるのは発音の悪さです。英語を読んだり英語を発するときには強勢や音調に注意しなければなりません。ある意味で個々の単語の発音よりも、形容詞と名詞が並んだときにどちらに強勢をおいて読むかという問題のほうが重要です。英語の強勢や音調には規則があります。しかし、私たちはその規則を教えてもらうことはありませんでした。語学教育においては、規則を教えなくとも、それにかわるだけの音声練習をすれば、それはそれでよいと思います。中学・高校と音声練習はしたことがないし音声規則は教えられたことがないないという状態が続いています。大学に入ってから音声練習というのは本末転倒であることはよくわかっているのですが、語学の１つの楽しみは音と遊ぶことだと考えています。音声練習から音読へと入ります。声を出して英文を読んで欲しいのです。

この練習と平行して、自宅学習におけるリスニングやリーディングの練習法としてシャドウイングを紹介しました。Shadowing とは、聞こえてくる音声に対してほぼ同時にあるいは一定の間隔をおいて、そのスピードと同じように発音することです。この練習を本気になって家庭でもやれば、英会話の練習にもリスニングの練習にもなります。

次の段階として演説を暗唱し、なるべく元の演説者に近くなるように練習します。演説としてはキング牧師の ‘I HAVE A DREAM' を取り上げました。

“I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character."

強勢の練習と演説の暗唱を通して、英語の読み方（発音の仕方）のこつが分かったら、それが自然にできるようでなければなりません。このため、音読のための教材を独自に用意し、それを家庭で何度も声を出して読んでもらうようにしました。大きな声で読むのですから、なるべく心に残る文章を読ませたいのです。

When the rich make war it's the poor that die. (Jean-Paul Sartre),

He is the happiest, be he king or peasant, who finds peace in his home. (Johan Wolfgang von Goethe)

これらの英文は強く読むところと弱く読むところが周期的にあらわれ、心地よいものでなかればなりません。

大学生にもなってこんなことをやらされると言って拒否する学生も出るのではないかと考えていましたが、学生は私の考える以上に音を出すことを楽しんでくれたように見えました。かっこよく発音できると楽しいし、もっと英語を勉強しようという気になります。そこが私のねらいです。

さて、秋学期になって学生の発音は良くなったのでしょうか。目に見えて、いや、耳にわかるほど良くなったとはいえませんが、何かをつかんでくれたと思います。

おすすめのドイツ映画

文学部　河　合　まゆみ

今回おすすめしたい映画は『グッバイ、レーニン！』、1989年の東西ドイツ統合を背景に、親子の絆を描いた心暖まるヒューマン・コメディーである。この映画は、2003年に本国ドイツで歴代の興行記録を塗り替える大ヒットとなり、その年のドイツ・アカデミー賞の９部門を独占している。日本でもミニシアター系で上映され、結構話題になったので、すでにご存知の人もいると思う。

映画をより深く理解し、楽しむためぜひ知っておいてほしいのが、東西分裂から統一に至るドイツ史の一コマである。第二次大戦後、敗戦国ドイツの首都ベルリンは、米英仏ソの連合軍による共同管理下に置かれた。1949年にドイツ連邦共和国（旧西ドイツ）とドイツ民主共和国（旧東ドイツ）とが成立するが、東から西への人口流出が絶えないため、1961年８月、東西を隔てる「ベルリンの壁」がソ連軍によって一夜にして築かれた。西ベルリンを囲むように築かれたこのコンクリートの壁は、全長約153ｋｍ、高さ約４メートル、至る所に監視塔が設置され、東ドイツ兵が警備にあたり、壁を乗り越えようとする者は撃ち殺された。東西冷戦時代の象徴であるこの壁が崩されたのが1989年、翌90年には東西ドイツの統一が実現した。

東ベルリンに住む主人公アレックスの家庭も、東西対立の歴史に翻弄される。医者である父親が、家族を残し一人西側へ亡命。母親は寂しさを忘れるためか、東ドイツの熱心な愛国主義者になり、社会活動に没頭する。そして舞台は、1989年10月、壁崩壊直前の東ベルリン。青年アレックスは改革を求めるデモ行進に参加、この息子の姿を偶然目撃した母は、ショックのあまり心臓発作を起こし、昏睡状態に陥ってしまう。責任を感じたアレックスが病院の母親を毎日見舞っている間、歴史は大きく転換する。11月９日に壁が崩壊、西側の資本主義が怒涛のように東へなだれこむ。アレックスの姉はバーガーキングに勤め始め、彼も衛星アンテナのセールスマンに転身、ロシア人の看護婦ララと恋仲になる。そして1990年６月、母思いのアレックスの気持ちが通じたのか、８ヶ月におよぶ昏睡から母親が奇跡的に目覚める。喜びも束の間、「もう一度強いショックを受けたら命取り」という医者の言葉に、アレックスは一大決心をする。東ドイツの消滅を母に知らせてはいけない！その日から、世の中が何一つ変わっていないというアレックスの一世一代の大芝居が始まるが、これが予想以上に難しかった！周囲を巻き込んでのアレックスの涙ぐましい奮闘。しかしこんな綱渡りが長く続けられるはずもない。姉や恋人も次第に彼に批判の目を向けるようになっていく。そしてある日、母親が一人でアパートの外に出てしまう。そこで彼女が目にしたものは･･･（映画のタイトルはこのシーンからきている）。父親の亡命にまつわる意外な真実、そして父との再会･･･この後の展開は実際に映画を見てのお楽しみである。東西ドイツの統一から10年以上がたった今だからこそ、この映画を作ることが出来たように思われる。壁崩壊前後の約１年間がスクリーン上にリアルに再現される。アレックスは母親をだます芝居の中で、昔を懐かしむのではなく、自分なりの理想的な統一の姿を模索していく。ここが、この映画の見所ともいえる。

『グッバイ、レーニン！』は、人間の運命がイデオロギーの対立にどのように翻弄されるか、そして家族の絆がそれ以上に強いものであることを教えてくれる。LL自習室にDVDを購入後、すでにかなりの人気を博しているようであるが、まだの人はこれからぜひ観てもらいたい。

ミュンヘン

文学部　土　屋　洋　二

ミュンヘンは南ドイツ・バイエルンの州都である。かつてはヴィッテルスバッハ家を戴くバイエルン王国の首都であり、今も130万の人口を擁するドイツ第三の大都市だが、それにしてはどこか長閑なおっとりしたところがある。20年前に暫く滞在したときには、街のあちこちで「ハートのある大都市」というキャッチフレーズを目にした。なかには「大いなる田舎」などと悪口を言う者もいて、良くも悪しくもクールな大都会になりきれないと自覚していたのだろう。

この春学期、久しぶりに半年間ミュンヘンに滞在したので、「ハートのある大都市」がどう変貌したか、関心をもって見ていた。そうして見ていると、幸いなことにこの町はハートを失わずにコスモポリタンな雰囲気を獲得しつつあるようだ。「頑固」を自認するバイエルン人もなかなかやるものである。そこでそんな町の様子を報告してみたい。

中世に生まれたドイツの町はみなそうだが、ミュンヘンの町も中心は広場である。マリーエンプラッツ（マリア広場）といって、金色燦然と輝く聖母マリアの像を頂いた石柱がその中央に立っている。広場の北辺を占めているのは、新市庁舎。名前に新はつくが、19世紀のネオ・ゴシックの建物で、大きなからくり時計は観光スポットである。時間がくると音程のずれた鐘の音とともに人形が踊りながら廻るのだが、その様子を見ようと広場をうずめた観光客は一斉に首を伸ばして上を見上げる。広場の周辺にはミュンヘン最大のゴシック教会フラウエンキルヒェやペーター教会などいくつもの教会また旧王宮（レジデンツ）とオペラ座や劇場、博物館、市民の胃袋を満たす食料品市場ヴィクトゥアーリエン・マルクトなどが徒歩数分の距離に集まっている。一時期、自動車に道路を占領されて衰退の気配がみえたというが、一帯を歩行者天国とする施策が功を奏して、広場は見事に町の活気の中心になっている。

そこで鉄道でミュンヘン中央駅に到着した観光客は、１キロほどの道筋を広場目指して歩いて行く。初めて来た人も道を間違える心配はない。この道筋こそミュンヘン一の繁華な通りで、両側にはにぎやかな店がぎっしり立ち並び、押し合いへし合い人の群れが絶えないからだ。その人波に混じって歩いていくと、途中の広場にカールストアという中世の市門を再現した門がある。今はただ道をまたいで立つだけの構築物だが、ミュンヘンに３つ残された市門の一つである。ということは、その門からマリーエンプラッツを結ぶ道は旧市街の半径をなす。そうして見れば、かつての市域は直径１キロほど。小さいと言うほかないが、かつて都市が城壁で防御を固めていたヨーロッパでは、近代にいたるまで都市とはこういうものだった。狭い市壁の内部に家々がぎっしり建てこみ、広場や教会の公共空間、宮殿などがひしめいて、農村とまったく違う空間をなしていたのである。近代の都市の膨張によって市壁はなくなったが、それでも数百年前の町の輪郭が今も容易に跡づけられる。ましてや20年ほどの経過では、旧市街の輪郭にほとんど変化がなかった。

だがそこを歩く人波はずいぶん変った。まず多彩になった。以前は目立たなかったアフリカ系の黒い顔、アラブ系の浅黒い顔、東アジアの人々も日本人は少数派になったと思うほど、中国人観光客、韓国人の姿が目立つ。欧米人はドイツ人との区別がつきにくいが、それでも東欧から来たとおぼしき人々、イタリア、フランスなどから修学旅行にきた子どもたちはそれと分かる。以前、外国人だとすぐ分かったのは、トルコ人労働者とその家族だった。街角の噴水に黒い民族衣装を着てかたまっていたトルコの女たちが印象的だったが、今その姿は見当たらない。かつて男たちの数歩後から下を向いて歩いていた彼女たちは、いまや色彩の波に混じって周囲に溶けこんでいる。

多彩になったのは、それだけではない。小さな子どもたちの姿も以前よりはるかに多くなった。20年前には３歳だった息子を連れてきたこともあって、街中であまり幼児の姿を見かけないことが気になっ

た。子どもたちはどこにいるのだろうと思ったものだ。ドイツ人にそのことを言うと、面目なさそうにドイツ社会は子どもに優しくないのかもしれない、と答えていた。それが今は様変わり、少子化どこ吹く風と思うほどだ。ある日の新聞には、ミュンヘンの人口増について自然増が社会増を上回ったという記事がでていた。子どもが増えているという印象は、錯覚ではないようだ。それに妊婦の姿もたいへん目立った。ローライズのパンツをはいて、ひしゃげたお臍を丸出しに、おなかで風を切って妊婦たちが歩いている。もともと一人暮らしの老人が多い社会だから、傾いた体をゆっくりゆっくりと大儀そうに運んでいく年寄りをよく見かけるが、そのかたわらを颯爽と次の世代が歩いていた。街を行く人々の年齢も多彩になっていたのである。

そんな人々の素顔を覗くには、ヴィクトゥアーリエン・マルクトに行くのがてっとり早い。マリーエンプラッツから南へペーター教会の脇を下っていくと、細長く広がる露天の市場がある。常設の店も多いが、近在の農家も野菜や乳製品を屋台に並べて売りにくる。ドイツでも中小都市ではショッピングセンターや量販店が進出して、市中の小売店が激減しているという。しかしミュンヘンで驚いたことの一つは、いまだに小売店が健闘していることだった。ましてやヴィクトゥアーリエン市場は、昔と少しも変らず多くの客を集めていた。スーパーより値段は若干高いが、品質は良いと土地の人に聞かされた。そして買い物の仕方が昔と変らない。客たちは店員とおしゃべりし、買いたい物を吟味しながら選んでいく。薄く切ったチーズや数本のソーセージでも長々とやり取りしてから買っていく。グリュース・ゴット（こんにちは）とダンケ・シェーン（ありがとう）は、客の側でもなしではすまされない。そしてそれ以上に大切なのがアイ・コンタクトだ。代金を支払いながら、相手の目を見る。視線が会うと、にっこり目が笑ってくる。ごっつい八百屋の親父が急に人なつっこく見えてくる。もっともアイ・コンタクトは市場の買い物だけではない。デパートでもレストランでも大事な挨拶で、視線が合ってはじめて互いの人格を認めあう、という感じだ。ドイツからの帰路、パリの飛行場で日本人観光客の話を聞くともなく聞いてしまった。中年女性の一団だったが、出会った店員たちの態度の悪さをこきおろしていた。客を人とも思っていない、というのである。何があったか知らないが、店員と視線を合わせていれば、印象はきっと違っていただろう。アイ・コンタクトはコミュニケーションの始まりなのだ。

そしてミュンヘンっ子のお祭り好きもこの町が冷たい大都会になれない理由だろう。２枚の写真でその様子をお見せしよう。これは有名なオクトーバー・フェストの情景だが、一枚はお祭りの二日目、最初の日曜日に催される行列である。上の写真は本当に一こまに過ぎない。実際は延々７キロに及ぶ大行列で、挽馬がビヤ樽を積んで車を引くビール会社の団体、騎士や農民、羊を連れた羊飼いや犬を連れた猟師、イタリアやオーストリアからも参加する団体があって、市内を巡って会場まで練り歩く。道端で見物する土地の人は、行列に知り合いを見つけると、声をからして声援する。すると貴婦人のコスチュームを着たおばさんが駆け寄って子どものほっぺにキスをする。なんだか村の運動会のノリである。

このお祭りの起源は1810年、バイエルン皇太子の結婚式だったというが、そんな由来は露ほども感じさせない。祭りの中心は、ほかでもない。ビール飲みなのである。中央駅から地下鉄で２駅ほどの所にある会場は、ふだんはただ広いだけの空き地だが、祭りの間、メリーゴーラウンドやお化け屋敷、射的やジェットコースターが立ちならぶ遊園地と化す。しかしこの遊園地が付けたしであることはすぐ分かる。メインはビール会社ごとに建てられた10棟ほどのテントだ。テントとは言うが、収容人員五千人から一万人に及ぶ巨大なつくりで、次頁の写真に見るように高い天井をもつ壮大なものである。訪ねて

きた客はここでビールを飲む。ひたすら飲む。ビールの種類はオクトーバー・フェスト用に醸造した１種類、注文も１リットルのジョッキだけ。これを両腕に５杯も６杯も抱えたウェイトレスが走りまわってテーブルに運ぶ。料理はローストチキンや鯖の燻製、ソーセージやハムにサラダ。塩気の強い喉の渇くものが多い。天気が好ければ、写真で見るようにこんなテントがみな満員になる。ドイツ中いな世界

中からやって来た客は、テント中央に造られたステージからがんがん響くバンドの音楽を聞きながらビールを飲む。しっとり会話を楽しむことなどここでは無理。なにしろオクトーバー・フェストなのだ。隣の席では若い人たちがベンチに立ちあがって歌手と一緒にがなりたてる。手を振り、足を踏みならす。向こうでも突然大声で歓声が沸きあがる。こうして深夜まで騒ぎは続く。16日間の期間中に消費されるビールの量は500万リットルになるという。

この20年の間にミュンヘンの町は想像以上に国際化していた。それでも深夜、女性が一人で地下鉄に乗れるほど治安は良い。世界中から人々を引きつける魅力は国力の大事な指標だと論ずる記事を読んだが、人々の移動の自由がかつてなく高まった今、これはもっともな指摘だと思う。アルプスの麓に広がる長閑なバイエルンの田舎の空気を今もなくしていないミュンヘンは、そんな魅力を認められてきているのだろう。

ＬＬ自習室を利用しよう!!

自習室にはビデオ、ＤＶＤ、ＣＤ、カセット、図書など語学自習に役立つ資料がたくさん備えられています。

○　語学検定試験対策の資料を利用して検定試験に挑戦してみよう！
○　ＮＨＫ語学講座でじっくり学習し、楽しく語学力を身につけよう！
○　カセットブースで授業用テープを利用し、授業の予習・復習をしよう！
○　海外の映画を観て外国文化や風俗・習慣の勉強を、そしてヒアリングアップにつなげよう！

などなど、あなたに役立つことがいっぱいです。これから何かを始めたいと思っているあなた、ぜひ、ＬＬ自習室を活用してください。

ＬＬ自習室は３号館1Fです。
講義期間中の開室時間は　月～土　9:10～21:30

愛知大学言語学談話会　―第30回―

公開講座「言語」2005 プログラム

〈前期〉愛知大学豊橋校舎研究館2階会議室
　　または5号館4階541会議室
〈時間〉14:30～16:30

2005年
①４月16日(土)　於　研究館２階会議室
「裏社交界のおんなたち
　―19世紀フランス高級娼婦列伝―」
　　加藤俊夫（愛知大学名誉教授）
「北京郵電大学における日本語教育を通して」
　　小池保利（名古屋産業大学非常勤講師）
②５月７日(土)　於　５号館４階541会議室
シンポジウム「アングロ・サクソン研究」
司会　田本建一
　（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
発表
「King Alfredの魅力」
　池　和子（愛知大学国際コミュニケーション研究科）
「イギリスの地名の研究」
　山田智子（愛知大学国際コミュニケーション研究科）
「アングロ・サクソン時代の結婚と結婚用語」
　田本真喜子（愛知大学非常勤講師）
③６月４日(土)　於　５号館４階541会議室
「漢文「聖体要理」」
　葛谷　登（愛知大学経済学部講師）
④ ６月18日(土)　於　研究館２階会議室
「コーパスを用いた語法研究」
　川端朋広（愛知大学短期大学部助教授）

公開講座「言語」30周年記念講演会
７月９日(土)　於　愛知大学車道校舎本館1005教室（予定）
「マイケル・トマセロと言語研究
　―21世紀の言語学は何を目指すのか―」
　講師　伊藤忠夫氏（中京大学教養部教授）

〈後期〉愛知大学車道校舎本館1003教室（予定）
〈時間〉14:30～16:30
⑤ ９月17日(土)
「フランス語初級学習者の弱点について」
　田川光照（愛知大学経営学部教授）
⑥10月１日(土)
「身体性から見る日本語文法
　―時制形式の意味機能―」
　山本雅子
　（愛知大学国際コミュニケーション学部助教授）
⑦11月５日(土)
「ウェブスター辞書の伝統」
　早川　勇（愛知大学経済学部教授）
⑧12月３日(土)
「エッセーの言語 ―モンテーニュを読む―」
　高橋秀雄
　（愛知大学国際コミュニケーション学部教授）
2006年
⑨１月７日(土)
「日・中・韓の言語教学雑感」
　陶山信男（愛知大学名誉教授）

外国語検定試験奨励金について

語学教育研究室では外国語検定試験合格者に奨励金（図書券）を贈る自主学習支援の制度を設けています。2004年度は延べ99名の学生に奨励金が贈られました。

2005年度も下記により受付しますので合格者は申し出てください。

記

１．対象学生
愛知大学豊橋校舎　学部及び短大の学生（留別生含む。）
（大学院生、オープンカレッジ生、科目等履修生、研究生は除く。）

２．奨励基準
追って教務課及びLL自習室の掲示板に示します。

３．受付期間
2006年度１月16日(月)～１月31日(火)

４．手　　続
学生証及び合格通知書を３号館LL自習室カウンターまで持参し、申請して下さい。

５．奨励の対象
2005年２月～2006年１月の間に合格した検定試験で、同一言語は１試験のみです。

６．その他
TOFFL、TOEICで対象外の試験がありますので、掲示で確認して下さい。